

理想的な英語教師像に関する実証的研究

— 普通科高校生と中学生の比較を通して —

保坂芳男

(2003年9月30日受理)

An Empirical Study on Professional Skills of English Teachers in High Schools

Yoshio Hosaka

The objective of this research is to clarify, in an empirical manner, what outstanding high school English teachers are like. First, 296 data samples were collected from students of an average academic level high school, by using questionnaires on a 5- likert scale. An exploratory factor analysis yielded six important factors. Then a three-way analysis of variance was performed where each factor score was a dependent variable and the attributes (grade or interest, score, and gender) of the subjects (the high school students) were independent variables.

Next, 345 data samples from junior high school students were also collected, by using the same questionnaires. The data was analyzed in the same manner. Eight factors were singled out.

In the end the results were analyzed in a comparative manner. The comparative study yielded five findings, including four differences (①~④) and one similarity (⑤) between the two.

- ① Junior high school students have a wider range of perception on what constitutes an outstanding English teacher.
- ② Junior high school students regard personal factors of English teachers more important.
- ③ Junior high school students hold higher regard for teachers' proficiency in English and want them to use that proficiency in class.
- ④ More attention should be paid to the first year junior high school students and the second and third year senior high school students.
- ⑤ Both junior high and senior high school students prefer English teachers who give good lessons to ensure their success in entrance exams.

Key words: comparative study, (junior) high school students, factor analysis, outstanding English teachers

キーワード：比較研究，中・高校生，因子分析，優秀な英語教師，多重比較

はじめに

昨今特色ある学校作りという名目で学校の多様化が進行しつつある。そのなかで、1999年4月より学校教育法の一部を改正することによって中高一貫教育を選択的に導入することが可能となった。その後、2002年4月までに全国で73校の中高一貫校が設置されている。その実施形態は生徒や保護者のニーズ等に応じて、①中等教育学校②併設型中学校・高等学校③連携型中学校・高等学校の3つの形態がある。

そこで問題となるのは教える教師の身分である。文部科学省のホームページでも同様のことが問題とされ、原則的には併設型や連携型の場合中高双方の免許状を持つものを配置することが望ましいとされている。ただ、免許状は取得時には双方のものを持ち合わせていたとしても教師の力量は経験や研修等で形成されることを考慮すると安易に交流を進めることは学習者たる生徒にとって実質上の不利益を被る虞を否定することはできない。

以上のことを鑑み本研究では、中学校および高校における英語教師の指導力について考えてみたい。

なおその際に調査対象の高校はふつう程度の普通科高校を選んだ。それは、中学と進路状況が似ていること、普通科高校に在籍する生徒の数が多し、普通科高校の授業内容がより中学校のそれに近いこと等の理由によるものである。

1.1. 先行研究について

金谷(1995)が述べているように英語教師に関する実証的な研究は極めて少ないようである。保坂(2003a)はその理由を、教師を研究対象とすることへのタブー視等の6つに理由をまとめている。保坂(2003a)は数少ない実証的な例として、小池(1988)を挙げている。その他最近の研究としては、横田(1997)や猪井(2002)があるが、実際の中学・高校生対象にアンケートを行ったものではなくそういう意味で実証性は乏しいといわざるを得ない。中学、高校の英語教師の資質を実証的に明らかにしたのものには保坂(2003a)(2003b)があるが、両者の比較となると全くの皆無であるように思われる。

本研究では、まず保坂(2003a)(2003b)を簡単に紹介し、その両者を比較することによって中・高英語教師の資質の特徴を明らかにしたい。

尚、保坂(2003a)(2003b)は同じ質問紙(Appendix 1参照)を用いてデータを集め同じ方法で分析している。

1.2. 理想的な英語教師について；中学生の場合

保坂(2003b)は、中学生345名のデータを分析して

以下のような結果を導いている。

まず、中学生の考える理想的な英語教師の因子として8つの因子を抽出している。

- ①カウンセリング・マインドで生徒に接し、学力をつける授業をする
- ②英語の高い運用能力を持ち、コミュニケーション能力がつく楽しい授業をする
- ③知識・教養が豊かで質の高い授業をする
- ④厳しく指導し英語力をつける
- ⑤生徒の立場に立った授業をする
- ⑥人間性がすぐれ、生き方を考えさせる授業をする
- ⑦総合的な英語力がある
- ⑧授業と関係のない話をする

次に生徒の学年、性、英語の好感度(または成績)を独立変数に、因子を構成する質問項目の総点を従属変数にして3要因の分散分析を行った。その結果は以下のとおりである。

- ①第1因子：カウンセリング・マインドで生徒に接し、学力をつける授業をする

英語の好きな生徒が嫌いな生徒に比べて第1因子を好むことがわかった。また、成績の良い生徒や普通の生徒は、悪い生徒に比べて第1因子の教師を好むことがわかった。

- ②第2因子：英語の高い運用能力を持ち、コミュニケーション能力がつく楽しい授業をする

女子生徒の方が第2因子を好むことがわかった。次に、英語が好きな生徒と普通の生徒は、嫌いな生徒に比べて第2因子を好むことがわかった。最後に成績の良い生徒や普通の生徒は、悪い生徒に比べて第2因子の教師を好むことがわかった。

- ③第3因子：知識・教養が豊かで質の高い授業をする
- 英語が好きな生徒は、嫌いな生徒に比べて第3因子を好むことがわかった。さらに成績の良い生徒や普通の生徒は、悪い生徒に比べて第3因子の教師を好むことがわかった。

- ④第4因子：厳しく指導し英語力をつける

まず1年生が、2年生や3年生に比べ第4因子を好むことがわかった。次に、男子生徒の方が第4因子を好むことがわかった。また、英語が好きな生徒と普通の生徒は、嫌いな生徒に比べて第4因子を好むことがわかった。最後に成績の良い生徒や普通の生徒は、悪い生徒に比べて第4因子の教師を好むことがわかった。

- ⑤第5因子：生徒の立場に立った授業をする

まず、1年生が3年生に比べ第5因子を好むことがわかった。また女子生徒の方が第5因子を好むことがわかった。

⑥第6因子：人間性がすぐれ、生き方を考えさせる授業をする

有意差はみられなかった。

⑦第7因子：総合的な英語力がある

1年生が3年生に比べ第7因子を好むことがわかった。また、女子生徒の方が第7因子を好むことがわかった。

⑧第8因子：授業と関係のない話をする

1年生の男子生徒で英語の成績の悪い生徒が第8因子を好むことがわかった。

1.3. 理想的な英語教師について；高校生の場合

保坂(2003a)は、高校生296名のデータを分析して以下のような結果を導いている。

①第1因子：受験学力がつく質の高い授業をする

②第2因子：知識・教養が豊かである

③第3因子：生徒の立場に立った授業をする

④第4因子：カウンセリング・マインドを持って生徒に接する

⑤第5因子：厳しい指導で英語力をつける

⑥第6因子：英語の高い運用能力を持つ

次に生徒の学年、性、英語の好感度（または成績）を独立変数に、因子を構成する質問項目の総点を従属変数にして3要因の分散分析を行った。その結果は以下のとおりである。

①第1因子：受験学力がつく質の高い授業をする

成績の良い生徒の方が、受験学力のつく質の高い授業を望んでいることが明らかになった。また、男子生徒の中では英語の好きな生徒の方が、受験学力のつく質の高い授業を望んでいることがわかった。

②第2因子：知識・教養が豊かである

これに関して有意差は見られなかった。

③第3因子：生徒の立場に立った授業をする

2年生の男子生徒が、3年生の男子生徒に比べて、生徒の立場に立って授業する教師をもとめていることがわかった。

④第4因子：カウンセリング・マインドを持って生徒に接する

成績の良い生徒の中では、3年生に比べ1・2年生の方が第4因子の資質を持つ教師を望んでいることが明らかになった。また、2年生においては成績の悪い生徒よりも普通か高い生徒の方がカウンセリング・マインドを持って接することができる教師を望んでいる傾向にあることもわかった。

⑤第5因子：厳しい指導で英語力をつける

2年生に比べ3年生の方が厳しい指導を望む傾向にあることがわかった。

⑥第6因子：英語の高い運用能力を持つ

英語が好きな生徒の方が、英語の運用力の高い教師を好む傾向にあることがわかった。また、3年生では英語の成績の良い生徒の方が英語の運用能力の高い教師を好む傾向にあることもわかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の通りである。

①保坂(2003a)(2003b)を分析することによって理想的な教師の因子の構造を比較する。

②抽出されたそれぞれの因子と被調査者の属性(学年、性、英語に対する好感度または成績)との関係を中学・高校で比較する。その際に、保坂(2003a)(2003b)では、生徒の学年、性、英語の好感度(または成績)を独立変数に、因子を構成する質問項目の総点を従属変数にして3要因の分散分析を行っている。その結果を比較する。

③保坂(2003a)(2003b)のデータを項目ごとにt検定を行い有意差($p < .05$)が見られるものを抽出することによって、中学生と高校生の考える理想的な英語教師像の違いを明らかにする。

3. 研究方法・成果

分析1, 2は保坂(2003a)(2003b)の研究結果を基に質的な比較を試みる。分析3は、保坂(2003a)(2003b)のデータをt検定で比較する。

3.1. 分析1：因子に関しての中高比較

保坂(2003a)(2003b)の因子分析の結果を比較して以下の6点が明らかにされた。

①カウンセリング・マインドについて

中学生の場合、入試の学力養成と絡めた形で抽出された。約95%以上の中学生が高校への進学を希望している状況から判断すると、英語教師にまず最初に求めるのは入試のための英語力をつけることであろう。ただ、それらの項目以上に因子負荷量が高いのは、生徒との好ましい関係を授業の中で作ろうとする姿勢である。10代前半の生徒を教育する上で特に必要とされる教師の資質であるように思われる。

②英語の運用能力について

高校生の場合は、独立した因子として抽出できたが、中学生の場合興味深い結果となった。英語教師の英語運用能力に関しては、授業でのコミュニケーション活動を行うための指導力の一部として抽出された。授業中ALTと流暢な英語で会話するJTEのこと

を中学生はイメージしているように思われる。

③知識・教養について

高校生の場合、雑談を含めての幅広い知識・教養という因子が抽出されたが、中学生の場合は少し複雑な結果となった。2つの因子に分かれ、1つは授業の内容を深めるためや、生徒の興味づけのための知識・教養という捉え方であり、もう1つは全くの雑談的な意味での知識・教養という捉え方であった。

④厳しい指導で英語力をつけるについて

中学生の場合も高校の場合とほとんど同様の項目が収束した。ただ、この点に関しては中学生の場合のみ、因子負荷量は最低(.356)ではあるが、質問項目58番(英語をやる必要性を教えてくれる)が含まれている。中学教師が、高校入試に向けて英語の授業の重要性を執拗に説いている姿が想像できる。

⑤生徒の立場に立った授業をするについて

中学生の場合は5番目の、高校生の場合は3番目の因子として抽出した。高校生の場合のみ、質問項目52番(訳をきちんと教えてくれる)が含まれている。未だに、普通科高校では授業中日本語訳を写す高校生の姿を想像することができる。

⑥教師の人間性について

中学生の場合のみ、第6番目の因子の最も因子負荷量(.650)が高いものとして、質問項目15番(英語よりも人間として優れている)が含まれている。多感な中学生に対して、生徒指導や進路指導等で重要な影響を与える中学校教師に必須の要因であるように思われる。

3.2. 分析2：属性との関係における中高比較

それぞれの因子と生徒の属性との関係において中高の質的比較を試みた結果、以下の3つのことがわかった。

①中学生の方が多様な英語教師観を持っている。中学生の場合は、8つの因子が抽出でき累積寄与率は49.3%で、しかも多くの因子が属性との関係で有意差が見られた。一方高校生の場合は、6つの因子しか抽出できず累積寄与率は44.0%であった。

②知識・教養に関して、高校生の場合は有意差が見られなかった。中学生の場合は、授業の内容を深める意味での知識・教養に関しては英語好きの成績が良い生徒が好む傾向にあった。一方で雑談に関しては、中学1年生の成績の悪くない男子生徒が好む傾向にあった。成績の悪い生徒が中1の段階ですでに学習への興味を失っていること、中1の特に男子生徒が精神的成長が同時期に女子生徒に比べ遅れていることが原因であるように思われる。中学1年生の英語

の学力が中程度の男子生徒に対しては、息抜きや緊張緩和的な余談が少しは授業中には必要であるようである。

③中学は1年生、高校は2、3年生の指導が重要であるように思われる。中学生の場合、1年生に有意差が見られたのは、第4因子(厳しく指導し英語力をつける)、第5因子(生徒の立場に立った授業をする)、第7因子(総合的な英語力がある)、第8因子(授業と関係のない話をする)であった。高校生の場合は、2年生では第3因子(生徒の立場に立った授業をする)、第4因子(カウンセリング・マインドを持って生徒に接する)が、3年生では第4因子、第6因子(英語の高い運用能力を持つ)に有意差がみられた。中学生の場合、入門期の指導が、高校生の場合、受験を受けて2、3年生の指導が重要であるようである。

3.3. t検定による中高比較

中学345人分、高校生330人分のデータを比較した。有意確率5%で2つの母平均の差を検定し等分散と仮定できる場合はt検定を、仮定できない場合はウェルチの検定を用いることによって両者の差を見た。その結果は以下の通りである。

①中学生の方が評価が高い項目

有意差が見られたもので中学生の方が評価の高かった質問項目をAppendix 2に示した。1番評価が高いのは5番の項目で、ゲーム等を行い、楽しい授業を希望していることが伺える。次は55番で生徒との人間関係が重要であることを物語っているように思われる。その他、英語の運用能力に関する項目(63番や32番)や生徒の立場に立った授業をすることにに関する項目(19番や31番)などの評価も高い。

②高校生の方が評価が高い項目

有意差が見られたもので高校生の方が評価の高かった質問項目をAppendix 3に示した。尚、平均値の差は、(中学生の平均値)-(高校生の平均値)なのでマイナス値となっている。1番評価が高いのは49番で大学入試では文法が重要であること、高校の授業では文法の授業がわかりにくく教師の指導を期待していることが伺える。一方で中学では文法をそれほど構えて教えない現状を反映しているように思われる。他に、入試の実力をつけることに関する項目(28番や48番、47番)も高校生の方が評価は高い。

③中学と高校の差があまりないもの

平均値が全く等しい項目は見られなかったが、0.2以下の項目が4つあった。9番(よくわかるように教えてくれる)、59番(生徒の質問にすぐに答えら

れる), 62番(生徒の実体験を話してくれる), 70番(外国人である)である。これらの項目は若干の差はあるものの中学生, 高校生に共通した項目のようである。

4. 結果の考察と今後の課題

本研究の目的は, 中学生と高校生の考える理想的な英語教師像を明らかにすることにあった。両者の研究成果を比較することによって, 4つの相違点(①~④)と1つの共通点(⑤)が明らかになった。

- ①中学生の方が多様な英語教師観を持っている。
- ②中学生の方が教師の人間的な側面に対する評価が高い。
- ③中学生の方が教師の英語の運用能力を重要視しており, 授業での活用を期待している。
- ④中学生の場合は中1が, 高校生の場合は高2, 3が指導上注意を要する学年である。
- ⑤中学生, 高校生とも入試に対応できる英語力をつけてくれる授業, さらにわかりやすい授業を望んでいる。

類似点は, 約20年前のGiles(1980)らの指摘と余りは変わっていないようである。むしろ相違点が多いということが問題である。同じ教科でありながらも中学と高校では教科の難易度の差以上に資質に関して多くの相違点があるように思われる。本研究結果は, 同じ教科とはいえ, 中高の英語教師の資質に関しては上記の相違点に注目する必要があることを示唆しているように思われる。

今後の課題としては以下のことが考えられる。

- ①高校の英語教師像を中学との比較で論じたが, 他校種の高校の場合との比較を試みる必要がある。
- ②公立の中学の場合はほとんど同じ教育課程なのでT中学のデータが一般化できるものと思われるが, 一応念のために他の中学校にも同様のアンケート調査を行い確かめる必要がある。
- ③さらに別の角度から中学, 高校の英語教師の資質を明らかにし今後の教員養成, 現職教育, 採用試験等に助言できればと思っている。

教師の資質, 指導力が問題とされる中で, 実証的な研究は今始まったばかりである。今後の多くの研究者による追研究, 新しい角度からの研究が望まれる。

【参考文献】

- Freudenstein, R. (1983). Training teachers for a changing world. In alatis, J. E., H. H. Stern and P. Stevens. (eds.) *GURT'83: Applied Linguistics and the Preparation of Second Language Teachers: Toward a Rationale Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1983*, 187-192.
- Giles, Howard, & Hildebrandt, Nancy. (1980). The English language in Japan: Social Psychological Perspective. *JALT Journal* 2, 62-87.
- 保坂芳男. (2003a). 「普通科高校英語教師の資質に関する実証的な研究」『高校英語教育研究』第17巻, 28-42.
- 保坂芳男. (2003b). 「中学校英語教師の資質に関する実証的な研究」『中国地区英語教育学会研究紀要』発表原稿.
- 猪井新一. (2002). 「学習者に望ましい英語教師像」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第53巻, 第1号, 39-46.
- 金谷憲編著. (1995). 『英語教育研究リサーチ②英語教師論』. 河源社.
- 小池直己著. (1988). 『英語教育の実践的研究』. 南雲堂.
- Koster, Cor J. (1986). English FLES in the Netherlands: how good must a teacher be? *Modern Language Journal*, 70, 1, 8-12.
- 三隅二不二著. (1978). 『リーダーシップ行動の科学』. 有斐閣.
- Moskowitz, G. (1976a). The classroom interaction of outstanding foreign language teachers. *Foreign Language annals*, 9, 2, 135-157.
- Moskowitz, G. (1976b). Competency-based teacher education: before we proceed. *Modern Language Journal*, 60, 1-2, 18-23.
- 縫部義憲著. (2001). 『日本語教師のための外国語教育学』. 風間書房.
- Nunan, D. (1991). *Language Teaching Methodology*. Cambridge University Press.
- 岡東壽隆. (2001). 「教師の専門性について」『日本教育経営学会紀要』. 43, 2-15.
- 横田 勉. (1997). 「外国語教師の役割とその教育機能」『山形大学紀要(教育科学)』第11巻第4号, 659-670.

(主任指導教官 小篠敏明)

Appendix 1 : 質問項目 (生徒用)

1. 外国人のように英語が上手く話せる
2. 生徒をひいきしない
3. 発音が上手である
4. 何よりも幅広い人間性を持っている
5. 授業でゲームや歌をするなどいろいろ工夫する
6. 英会話が出来るように教えてくれる
7. 英語の楽しさを教えてくれる
8. 文法ばかりの授業をしない
9. よく分かるように教えてくれる
10. 教え方が丁寧である
11. 基本を教えてくれる
12. 教科書にとらわれない授業をする
13. 教科書どおりに教えてくれる
14. 教室全体の気配りが出来る
15. 英語よりも人間として優れている
16. 時事問題や生活に密着した授業をしてくれる
17. 授業の意味・目的を明確にしてくれる
18. 授業中必ず一回あててくれる
19. 授業中前回の復習をしてくれる
20. 授業に計画性がある
21. 英語を読む時間を多く取ってくれる
22. 授業の板書が丁寧である
23. 受験に関係なく教えてくれる
24. 授業の進度が速すぎない
25. 授業中退屈を感じさせない
26. 授業で暗記を強いるのではなく根拠を教えてくれる
27. 授業を延長しない
28. 宿題を出してくれる
29. 興味のある授業をしてくれる
30. 生徒が分かるまで待ってくれる
31. 生徒が理解してるか確認してくれる
32. 気軽に英語で話しかける
33. 生徒の意見を聞く
34. 生徒の英語力を理解して授業を進める
35. 生徒の質問に答えてくれる
36. 生徒一人一人を大切にしてくれる
37. 教材に関して深い知識を持っている
38. 質問に行きやすい
39. 人生・生き方を話してくれる
40. テストで部分点を評価してくれる
41. 入試のことを考えて授業をしてくれる
42. 先生の熱心さ・真剣さが伝わってくる
43. 世間話が面白い
44. 世界的な視野で物を考えられる
45. 勉強熱心な教師である
46. プリントで授業を進める
47. 文法だけでなく長文の内容を深めてくれる
48. 長文の読み方を教えてくれる
49. 文法を丁寧に教えてくれる
50. ポイントを押さえて教えてくれる
51. メリハリのある授業をする
52. 訳をきちんと教えてくれる
53. 訳中心ではなく内容理解に重点をおいて授業をする
54. 厳しく指導してくれる
55. 友達のような関係の教師
56. 英語に関する知識が豊富である
57. 英語圏の国の文化を話してくれる
58. 英語を学ぶ必要性を教えてくれる
59. 生徒の質問にすぐに答えられる
60. 英語以外の様々な知識が豊富である
61. 雑談(授業に関係のない話)が多い
62. 先生の実体験を話してくれる
63. 留学経験がある
64. 明るく楽しい性格である
65. 授業でやったことをテストに出す
66. 怒らない
67. 有名な大学を出ている
68. 生徒を馬鹿にしない
69. 自分(生徒)と性格が合う
70. 外国人(ネイティブスピーカー)である
71. 生徒の相談にのってくれる
72. 生徒に対していばった態度をとらない
73. 英語の不得意な生徒の気持ちが分かる

Appendix 2. 中学生の評価が高かった項目

質問番号	自由度	t値	平均値の差
5番	590.908	8.536	.79****
55番	639	4.742	.44****
63番	636.703	3.808	.35****
67番	638.785	3.292	.33***
19番	638.644	3.662	.32****
31番	639	3.864	.31****
8番	639	3.538	.28****
12番	639	3.515	.28****
32番	637.365	2.577	.25*
69番	638.375	2.647	.24**
18番	638.530	2.241	.23*
14番	637.442	2.840	.22**
30番	639	2.186	.20*
60番	639	2.319	.20*
70番	638.053	2.093	.19*
59番	639	2.296	.18*
62番	638.849	2.110	.18*

*= $p < .05$ **= $p < .01$ ***= $p < .005$ ****= $p < .0001$

Appendix 3. 高校生の評価が高かった項目

質問番号	自由度	t値	平均値の差
49番	618.022	-5.421	-.42****
45番	636.658	-4.485	-.40****
28番	623.808	-3.633	-.34****
48番	635.137	-3.715	-.30****
47番	630.159	-3.553	-.28****
38番	631.119	-3.236	-.25***
51番	638.924	-2.607	-.21***
9番	601.571	-2.930	-.17****

*= $p < .05$ **= $p < .01$ ***= $p < .005$ ****= $p < .0001$